

社会的問題解決の方略と目標

—中国と日本の大学生における比較分析—

The Strategy and Intention of Social-Problem-Solving —A Comparison in Japanese and Chinese University Students—

羅 蓮 萍*

Lianping Luo

(要旨)

社会的問題解決とは、社会的相互作用の中で「自己の人格的目的を達成するための自己主張及び自己抑制の過程」である。社会的問題解決方略には、性別、地位、親密さなどの当事者属性のほかに、社会的動機づけとしての解決目標も影響を果たしている。地域や文化により社会的問題解決方略と目標は特徴があり、それに関する検討は日米間、日英間といった東洋と西洋の枠組みの中で展開されてきた。しかし、同じく東洋文化圏に属する中国と日本の間に関しては行われていない。本研究は、仮想的な対人葛藤場面を設定し、中国と日本の大学生を対象に、社会的問題解決方略及び葛藤解決目標について比較検討することにした。結果として、以下のような特徴が明らかにされた。

①社会的問題解決方略においては、男子の方が直接的攻撃を、女子の方が間接的攻撃、間接的主張、抑制的方略をとる傾向が高い。②社会的問題解決方略の選択においては、問題場面による差異が存在する。③大学生の社会的問題解決方略は、中国と日本において顕著な差異がみられる。典型的には、騒ぎ回避抑制の方略は中国の方が高く、間接的攻撃（表情攻撃、背後攻撃、断絶攻撃）、間接的主張、関係重視抑制、ジャンケンの各方略においては日本の方が高くなっている。各場面に選択されている傾向の高い方略においては、持物の損害場面では、中国では男女ともに非故意性抑制であり、日本では男女ともに間接的主張となっている。意見の対立場面では、中国では男女ともに直接的主張であり、日本では男子が関係重視抑制、女子が間接的主張となっている。名誉の侵害場面では、中国では男女ともに間接的主張で、日本では男女ともに断絶攻撃である。顕著な性差がみられた方略は、中国では少ない傾向であった。④葛藤解決目標においては、社会的目標は中国が日本より高く、関係目標は日本が中国より高い。女子の社会的目標も関係目標も男子より有意に高い。経済的目標においては両国間、男女間ともに顕著な差異は見られなかった。

1. 問題及び目的

社会的問題解決とは、社会的相互作用の中で「自己の人格的目的を達成するための自己主張及び自己抑制の過程」と定義されている（東・野辺地、1992）。自己主張及び自己抑制に関する比較文化的研究は、主として、日米

間とか日英間といった東洋と西洋の文化的特徴の差異という枠組みの中で、早期から多くの注目を集め、成果も挙げてきている（柏木、1988；箕浦、1990；吉武、1991；東、1994；佐藤、1991,1993,1994,2001）。徐（2004）は、米国と韓国の間、カナダと韓国の間における比較研究はあったが、同じ東洋文化圏に属す

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

る日本と韓国との間における比較研究はあまり行われていないと指摘し、小学校5・6年生を対象に、子どもの社会的問題解決方略に関する日韓比較研究を行った。その結果、韓国の児童は日本より全体的に直接的主張、直接的攻撃、間接的主張、間接的攻撃を多く用い、日本の児童は韓国より抑制的方略を多く用いる傾向を見出している。

一方、問題解決に際して、性別、地位、親密さなどの当事者属性の影響要因のほかに、社会的動機づけを強調する多目標理論が提起された (Ohbuchi et al, 1996 ; Fukushima & Ohbuchi, 1996)。大淵ら(1996)は、宮城・福島両県下の学校に赴任していた ALT (自治体国際協会を通じて各都道府県の中学校・高等学校の外国語補助教師として採用された外国人。英語を母国語とする大学卒、30歳未満の男女で、多くはアメリカ、カナダ、イギリスの出身者)と、同じ学校に勤務する日本人教師を対象に、葛藤経験を想起させ、葛藤解決の目標、方略などについて調査した。その結果、ALT は日本人教師より公正目標、日本人教師はより資源目標 (経済的目標) と敵意目標 (「相手の悪い行為を罰したかった」「相手を打ち負かしたかった」) を強く期待した、ALT は相対的に攻撃的方略を多用し、日本人教師は相対的に回避的方略 (抑制方略) を用いることが多いことを明らかにした。

徐 (2004) は、東洋と西洋という文化の枠組み間のみならず、同じ東洋文化圏に属する日韓間にも問題解決方略において差異が見られることを明らかにした。日本と中国は地理歴史、言語文化、社会制度など様々な面において異なっており、問題解決方略の選択においてもそれぞれ特徴があるのではないかと考えられる。しかし、社会的問題解決に関する日中比較研究は今日まであまり見られない。また、従来、社会的問題解決に関する比較研

究はほとんどが横断的なものであり、縦断的な視点で考察したものはあまり見られない (羅・堂野, 2005)。さらに、葛藤解決目標についての日中比較研究も見当たらない。

以上の先行研究の動向を踏まえ、本研究では、仮想的な対人葛藤場面を設定し、日本と中国の大学生を対象として、社会的問題解決方略及び葛藤解決目標について比較検討することにした。日中間の質問項目の内容は同一となるように心掛け、実際の調査においては特に留意して慎重な手続きのもとに実施した。

本研究は、社会的問題解決方略に関して中日間の比較研究をすること、社会的問題解決方略に影響を与える社会的環境的背景要因として葛藤解決目標を取り上げて比較研究することが独創的な側面となっている。本研究の結果は、この分野の研究における先駆的な示唆を提供することができ、拡大しつつある国際理解および国際交流における貢献が期待されるところである。

2. 方法

(1) 対象者と実施時期

1 回目の調査は、中国では2006年4月、日本では2006年5～7月に実施した。中国においても日本においても男子が少ないため、中国では2006年10月、日本では2006年11～12月に男子を対象に補足調査を行った。最終的に、中国では577人(男51.0%、女45.9%、不明3.1% ; 文系65.5%、理系27.6%、不明6.9%)、日本では590人(男50.8%、女47.5%、不明1.7% ; 文系59.0%、理系38.5%、不明2.5%) の有効回答を得られた。

調査協力を得たのは中国江西省の南昌大学と日本の国立山口大学であり、いずれも医学部、工学部を含めた総合大学である。日中共に大学生の出身地は他の都道府県 (省市) に

もあるが、山口県（江西省）が中心的に最も多く占めている。

江西省は中国南部の内陸に位置し、古来「魚米之郷」として栄え、新中国成立後も「革命の根拠地」として重用されてきた。しかし、改革開放後は、経済的にも意識的にもそれほど発展している地域とはなっていない。見方を変えれば、伝統的な文化や意識はまだ残されている地域といえよう。一方、日本における山口県の場合も、かつて「維新の地」として伝統的な文化の先駆的な存在でもあり、同様の位置づけになると考えられる。

中国・日本ともに今日における教育制度、教育課程は「6・3・3」制に基づいており、今回は対象の学年を大学3年生としたため、対象者は20～21歳がほとんどとなっている。中国においては「飛び級」や「留年」などの制度も認められており、日本の学生群よりも年齢の開きがやや大きくなっている。

（2）質問紙の構成

社会的問題解決方略については、5つの対人葛藤場面を設定し、それぞれの場面には、葛藤を提示した上、実際に例示した各種の方略通りに行動する可能性、その葛藤場面の自分にとっての重要性について質問した。行動する可能性については、「いつもこのようにする（4点）」から「そうすることが全くない（1点）」までの4件法により評定させた。重要性については、「とても重要（4点）」から「全く重要でない（1点）」までの4件法により評定させた。

葛藤解決目標については、12項目の目標を提示し、それぞれの目標に対して、「強く望む（4点）」から「全く望まない（1点）」までの4件法により選択させた。

本研究は比較文化的な性質をもつものであり、用いる言語の問題は結果に影響を及ぼす隠れた要因になることが考えられる。したがっ

て、質問項目の言語化には特に配慮した。つまり、対象者は中国と日本に在住している大学生であり、彼らに可能な限り同じ内容の質問項目となるように日本語を中国語に翻訳した。翻訳においては、筆者が翻訳した上で、中国の大学の日本語科教授を含む3人の合議により確定した。

（3）対人葛藤場面の作成

社会的問題解決方略の採用には、葛藤の内容、問題解決の目標、当事者の文化的背景、性別、年齢、社会的支配性、知能、社会的評価、柔軟性など様々な要因が絡み合っ影響を及ぼしている。当事者相互の親密性や対人間地位などの相互関係による影響なども多くの研究で指摘されている（嘉数ら，1991；金城・梅本，1991；小森・宮本，1992；倉持，1992）。さらに、近年、問題場面の状況性が解決の方略を大きく左右することも明らかにされてきている（吉野，1987；二神・神谷，2004；徐，2004, 2005）。

以上の先行研究及び今日における日本と中国の事情など考慮し、本研究では、Table 1に示したとおり、クラスの中の同性の友達（親友という意味ではなく、普通に話せる友人）との「持物の損害」、「意見の対立」、「権利の侵害」、「名誉の侵害」、「役割の怠惰」という5つの対人葛藤場面を作成した。

他の潜在要因の影響を最小限に抑制するため、葛藤場面の作成においては以下のような点を考慮した。①葛藤は出来るだけ日本と中国の両方の学校生活の中で馴染みがあり理解しやすい内容のものとする。②葛藤は、1対1の人間関係の中で、相互関係が明確となるようにする（クラスの中の同性の友達）。③葛藤の責任所在が相手であることを明示する。④出来るだけ価値観や常識的判断が入らないように、中立的で客観的に葛藤事実を記述する。⑤明確に変化や相違を反映させるため、

Table 1 対人葛藤場面

場面分類	葛藤内容
1. 持物の損害	廊下に立っているあなたにクラスの友達がぶつかってきて、あなたのメガネは落ちて、壊れてしまいました。友達は「すみません」と言って、立ち去ろうとしました。
2. 意見の対立	昼休み、好きな本を借りて読んでいると、クラスの友達がそばに来て、「本はやめて、外で遊ぼう」と言いました。あなたは本が読みたくて一度断りましたが、その人は依然として誘い続けました。
3. 権利の侵害	あなたはクラスのコンピューターを使うために長い間待ち、やっとあなたの番になりました。あなたはコンピューターを動かし始めましたが、資料を探すために、少しの間に離れました。戻ってくると、次の番の友達がコンピューターの前に座り、「もう僕（私）が使っているのだから、じゃまをしないでよ」と言いました。
4. 名誉の損害	ある日、あなたが教室に入ろうとすると、クラスの友達があなたの悪口を言っているのが聞こえました。
5. 役割の怠惰	あなたのクラスでは実験室の後片付けを放課後2人ですることになっています。今日、あなたは既に後片付けを始めたのに、相手の友達はまだ知らないふりで他の人と遊んでいます。

葛藤はあまり深刻でない内容とする（深刻な葛藤は対決方略に集中してしまう可能性が高いと考えられる）。

（4）社会的問題解決方略の分類

社会的問題解決方略の分類は、研究の目的や視点、葛藤場面の内容などによって多様であり、方略の数やカテゴリー、さらに定義そのものまでがさまざまとなっている。標準化された分類基準があるとは言えない（子安・鈴木，2002；徐，2004；羅・堂野，2005）。

Albert & Emmons (1970) は、対人反応のパターンを主張的反応、非主張的反応、攻撃的反応の3種類としている。主張的反応は、相手の権利を侵害しない範囲内で自分の考えや感情を素直に表現することである。非主張的反応は、自分の考えや感情を抑えて外に出さず、自分の権利が侵害されていても我慢し何も言わないことである。攻撃的反応は、自分の考えや感情を強く表出し、相手の権利を侵害したり無視したりすることである。Phelps & Austin (1975) は攻撃的反応を直接的攻撃と間接的攻撃と分類している。間接的攻撃は、相手に直接表現をせず、いやな

表情や身振りをして間接に伝える行動である。徐 (2004, 2005) は、社会的問題解決方略を直接的主張、直接的攻撃、抑制的受容、間接的主張、間接的攻撃、回避的攻撃、背後の非難の7タイプに分類した。また、主成分法の因子分析法により、直接的主張、直接的攻撃、抑制的受容を「直接的方略」、間接的主張、間接的攻撃、回避的攻撃、背後の非難を「間接的方略」と大別している。

以上の先行研究及び日本と中国の事情を参照し、本研究では、Table 2 に示すとおりに分類した。徐 (2004, 2005) は、「背後の非難」を抑制的受容とともに非主張的反応とし、背後の非難は社会性の否定的な側面で、抑制的受容は社会性の肯定的な側面としている。本研究では、背後の非難（背後攻撃）も相手の名誉や人間関係に負の影響を及ぼすと考え、「間接的攻撃」の一つとみなすことにした。

一方、日米などの比較研究においてはジャンケン志向という日本独自の傾向が見出されている（金城・梅本，1991；渡部，1993；山岸，1998）。日本においてジャンケンが志向される理由として、低学年では「早く決まる

から」、中学年では「喧嘩にならないから」、高学年では「公平、平等だから」といった反応が顕著であった。梶田(1988)は、対人葛藤解決のスタイルとして、欧米では他譲志向(他者を譲歩させる)が優位であるのに対して、日本では伝統的に無譲志向(無問題化)や状況離脱志向(「なかったことにしよう」、「誰も傷付けないようにしよう」という意識)、「自他の顔が立つよう工夫する」、「妥協する」、「考えないようにする」といった解決法が優位を示すと考察している。両者ともに引き下りせずにそのまま安易に解決に至ろうとするジャンケン志向は、梶田のいう無譲志向に包含されるものと考えられる(金城・梅本、1991)。では同じ東洋圏に属する中国ではどうであるか、果たしてジャンケン志向は日本独自の傾向であるのか。このことについて解明するため、意見の対立、権利の侵害の2場面において「ジャンケン」方略を設定した。

因みに、葛藤の性質により、各場面に共通する方略のほかに、その場面に適合する独自の方略が存在することも考えられる。以上の方略の他に、持物の侵害場面では「故意ではないと考え、気にしないように振舞う」という相手の非故意のために抑制的方略を取る「非故意性抑制」方略、権利の侵害場面では「自分が離れたことが悪いので、何も言わず

に待つ」という自分に責任がある思いから抑制的方略を取る「自己責任抑制」方略、名誉の侵害場面では「悪口を言う人には何も言う必要がないと考え、聞こえなかった振りをする」という無効力、無意義の判断から抑制的方略を取る「無意義抑制」方略を付け加えた。

(5) 葛藤解決目標

大淵ら(1996)、大淵・福島(1997)に参照し、以下の12項目を作成した。

- ①私は、相手と良い関係を維持したい。
- ②私は、相手の悪い行為を罰したい。
- ③私は、相手から尊重され、丁寧に扱ってもらいたい。
- ④私は、自分の名誉、体面、評判を回復したい。
- ⑤私は、自分の自由やプライバシーを守りたい。
- ⑥私は、金銭的に有利な結果を得たい。
- ⑦私は、相手とお互いに理解し合いたい。
- ⑧私は、相手の考えや行動を変えたい。
- ⑨私は、相手から公平に扱われたい。
- ⑩私は、自尊心やプライドを回復したい。
- ⑪私は、自分の仕事、勉強、予定していたことを進めたい。
- ⑫私は、弁償してもらいたい。

3. 結果

以下、社会的問題解決方略については国(2)×性(2)×場面(5)の3要因を対象とした計画で、葛藤解決目標については国(2)×性(2)の2要因を対象とした計画で、日中間、男女間、

Table 2 社会的問題解決方略の分類と定義

	直接的攻撃	叩くや怒鳴るなど、自分の考えや感情を強く表現し、相手に攻撃性を示す。
攻撃的 方略	間接的攻撃	言葉で相手を攻撃しないで、いやな表情や身振りをして間接的に伝える。
	背後攻撃	直接的に表現しないで、裏で第三者に不満を漏らす。
	断絶攻撃	直接的に表現しないが、内心不満を感じ、相手との関係を徐々に絶つ。
主張的 方略	直接的主張	攻撃性を示さず、説得や取引など言葉で自分の考えや感情を率直に伝える。
	間接的主張	直接言わないで、暗示的に自分の考えや感情を伝える。
抑制的 方略	関係重視抑制	相手との関係を重視するため、自分の要求や感情を抑える。
	騒ぎ回避抑制	騒ぎになることが恥ずかしいため、自分の要求や感情を抑える。

場面間を比較検討する。

以下の Table では、各方略及び場面を、直接的攻撃は「直攻」、表情（態度）攻撃は「表情攻」、背後攻撃は「背後攻」、断絶攻撃は「断絶攻」、直接的主張は「直主」、間接的主張は「間主」、関係重視抑制は「関係抑」、騒ぎ回避抑制は「騒ぎ抑」、非故意性抑制、自己責任抑制、無意義抑制は一括して「特殊抑」、ジャンケン「ジャン」、持物の損害場面は「持物」、意見の対立場面は「意見」、権利の侵害場面は「権利」、名誉の侵害場面は「名誉」、役割の怠惰場面は「役割」、として省略して示す。

3-1 社会的問題解決方略

国(2)×性(2)×場面(5)の3要因の分散分析(ANOVA4)を行った結果、日中間、男女間、場面間、各要因間の相互作用、ほとんどの項目において有意差が見られた。以下は各要因に関する詳細な分析の結果である。

(1) 国×場面の2要因に関する分散分析の結果

Table 3 は、日中別、場面別の社会的問題解決方略と重要度の評定値である（下位検定において日中間に有意差が見られた項目は表中に*印で示した）。まず、国(2)×場面(5)の多変量分散分析(ANOVA4)及びT検定の結果、日中間、場面間、国×場面の交互作用はほとんどの方略において有意差が認められた。

表に明らかであるように、日中間で比較してみると、表情攻撃、背後攻撃、断絶攻撃、間接的主張、関係重視抑制、ジャンケンの各方略において、日本の方が高くなっている。ただし、下位検定の結果、意見の対立場面における表情攻撃、名誉の侵害場面における間接的主張においては中国の方が高い。騒ぎ回避抑制においては、中国の方が高くなってい

る。直接的攻撃、直接的主張においては、日中間に顕著な差異は見られない。ただし、下位検定の結果、意見の対立、名誉の侵害及び役割の怠惰場面における直接的攻撃は中国の方が高いが、持物の損害場面における直接的攻撃は日本の方が高くなっている。意見の対立及び名誉の侵害場面における直接的主張は中国の方が高いのに対して、持物の損害及び役割の怠惰場面における直接的主張は日本の方が高い。重要度においても、全体的には日本の方が高いが、下位検定の結果、意見の対立場面においては中国の方が高い。

場面間においては、全ての方略において有意差が見られ、「等質サブグループ」の欄で示している（Table 3 参照）。1～5の数字は場面番号であり、順に持物の損害、意見の対立、権利の損害、名誉の侵害、役割の怠惰場面を表わしている。評定値の高いものほど前に位置し、異質なグループ間、つまり有意差がある場面間は「>」記号で区切っている。「>」記号の前の場面は「>」記号の後ろの場面よりその評定値が統計的に有意に高い($p < 0.05$)。「>」記号で区切っていない場面間は統計的に有意差がない($p > 0.05$)ことを意味する。

同一の場面番号が「>」記号の前後ともに存在する場合には、その場面が「>」の前後の2つのグループに同時に属し、それぞれのグループの他の場面と有意差がないことを意味している。例えば、「43>35」は、場面4が場面5より統計的に有意に高いが、場面4と場面3の間、場面3と場面5の間には有意差がない、ということの意味している。

直接的攻撃において、役割の怠惰場面が最も高く、意見の対立場面が最も低く、場面間有意差が見られた。ただし、下位検定の結果、持物の損害場面は中国では最も低いが、日本では意見の対立及び名誉の侵害場面より高く

Table 3 国別、場面別の社会的問題解決方略と重要度の評定値

		持物	意見	権利	名誉	役割	計	等質サブグループ
直攻	中国	1.38	1.43****	1.67	1.49***	1.89*	1.58+	5>3>42>21
	日本	1.55****	1.23	1.63	1.35	1.77	1.51	5>31>42
	計	1.47	1.33	1.66	1.42	1.83		5>3>14>2
表情攻	中国	2.38	1.75*	2.18	2.39	2.17	2.18	41>35>2
	日本	2.54***	1.64	2.47****	2.40	2.44****	2.30****	135>354>2
	計	2.46	1.69	2.33	2.39	2.31		1>435>2
背後攻	中国	2.24	1.61	2.18	2.16	2.00	2.04	134>5>2
	日本	2.73****	1.70+	2.51****	2.48****	2.32****	2.34****	1>34>5>2
	計	2.49	1.65	2.34	2.32	2.16		1>34>5>2
断絶攻	中国	1.79	1.50	1.95	2.26	1.69	1.85	4>3>1>5>2
	日本	2.05****	1.44	2.17****	2.85****	1.89****	2.08****	4>3>1>5>2
	計	1.92	1.47	2.06	2.56	1.79		4>3>1>5>2
直主	中国	1.96	2.77****	2.80	2.38****	3.01	2.59	5>32>4>1
	日本	2.32****	2.46	2.88	1.90	3.32****	2.58	5>3>2>1>4
	計	2.14	2.61	2.84	2.14	3.17		5>3>2>14
間主	中国	2.33	2.51	2.42	2.66****	2.57	2.50	45>52>23>31
	日本	2.82****	2.52	2.42	2.35	2.75****	2.57*	15>2>34
	計	2.57	2.52	2.42	2.51	2.66		5>12>24>3
関係抑	中国	2.37	2.13	1.98	2.05	2.02	2.11	1>245>453
	日本	2.38	2.54****	2.04	2.48****	1.95	2.28****	24>1>35
	計	2.37	2.34	2.01	2.27	1.99		12>24>35
騒ぎ抑	中国	2.35****	2.06****	2.04****	2.13	2.00****	2.12****	1>423>235
	日本	2.10	1.91	1.88	2.18	1.78	1.97	41>23>35
	計	2.22	1.98	1.96	2.15	1.89		14>23>5
ジャン	中国		1.77	1.60			1.69	2>3
	日本		1.86	1.73****			1.79**	2>3
	計		1.82	1.67				2>3
重要度	中国	2.61	2.83****	2.71	2.91	2.35	2.68	42>3>1>5
	日本	3.09****	2.23	2.89****	3.11****	2.64****	2.79****	41>3>5>2
	計	2.85	2.53	2.80	3.01	2.49		4>13>25

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

なっている。表情攻撃においては、持物の損害場面が最も高く、意見の対立場面が最も低く、場面間に有意差が見られた。背後攻撃においては、持物の損害場面において最も高く、意見の対立場面が最も低いという結果であった。断絶攻撃においては、名誉の侵害場面が最も高く、持物の損害場面が最も低いという結果であった。直接的主張においては、役割の怠惰場面が最も高く、名誉の侵害及び持物の損害場面が最も低くなっている。間接的主

張においては、役割の怠惰場面が最も高く、権利の侵害が最も低くなっている。ただし、下位検定の結果、名誉の侵害場面は中国では最も高いのに、日本では最も低くなっている。関係重視抑制においては、持物の損害及び意見の対立場面が最も高く、役割の怠惰及び権利の侵害場面が最も低いという結果であった。騒ぎ回避抑制においては、持物の損害及び名誉の侵害場面が最も高く、役割の怠惰場面が最も低くなっている。ジャンケンにおいては、

意見の対立場面が権利の侵害場面より高いという結果であった。重要度においては、名誉の侵害場面が最も高く、役割の怠惰及び意見の対立場面が最も低くなっている。ただし、下位検定の結果、意見の対立場面は、中国では名誉の侵害場面に続いて高いのに対して、日本では最も低くなっている。また、持物の損害場面は、中国では役割の怠惰場面に続いて低いのに対して、日本では名誉の侵害場面に続いて高くなっている。

(2) 性×場面の2要因に関する分散分析の結果

Table 4 は性別、場面別の社会的問題解決方略と重要度の評定値である (*印は下位検定で男女間に有意差の見られた項目である)。性(2)×場面(5)の多変量分散分析(ANOVA 4)及びT検定の結果、男女間、場面間はほとんどの方略において有意差が見出された。

性差に関しては、直接的攻撃のみにおいて男子の方が女子より高いという結果であった。

Table 4 性別、場面別の社会的問題解決方略と重要度の評定値

		持物	意見	権利	名誉	役割	計	等質サブグループ
直攻	男	1.58****	1.39***	1.80****	1.51****	1.97****	1.65****	5>3>14>2
	女	1.37	1.25	1.49	1.32	1.67	1.42	5>3>14>42
	計	1.47	1.32	1.65	1.42	1.82		5>3>14>2
表情攻	男	2.39	1.67	2.24	2.35	2.21	2.17	14>35>2
	女	2.56****	1.72	2.43****	2.44+	2.43****	2.31****	1>453>2
	計	2.47	1.69	2.33	2.40	2.32		1>435>2
背後攻	男	2.30	1.58	2.17	2.20	2.01	2.05	1>43>5>2
	女	2.72****	1.74****	2.56****	2.47****	2.35****	2.37****	1>3>4>5>2
	計	2.51	1.66	2.37	2.34	2.18		1>34>5>2
断絶攻	男	1.82	1.47	2.00	2.41	1.73	1.89	4>3>15>2
	女	2.03****	1.47	2.14****	2.74****	1.85*	2.04****	4>3>1>5>2
	計	1.93	1.47	2.07	2.57	1.79		4>3>1>5>2
直主	男	2.23****	2.63	2.82	2.17	3.10	2.59	5>3>2>14
	女	2.05	2.59	2.87	2.09	3.26****	2.58	5>3>2>41
	計	2.14	2.61	2.85	2.13	3.18		5>3>2>14
間主	男	2.42	2.43	2.31	2.42	2.56	2.43	5>214>3
	女	2.76****	2.62****	2.53****	2.59****	2.79****	2.66****	51>24>3
	計	2.59	2.52	2.42	2.50	2.67		5>12>24>3
関係抑	男	2.33	2.29	1.95	2.20	1.97	2.15	12>24>53
	女	2.43+	2.41*	2.08**	2.37***	2.00	2.26***	12>4>35
	計	2.38	2.35	2.01	2.28	1.99		12>24>35
騒ぎ抑	男	2.16	1.89	1.89	2.08	1.89	1.98	14>523
	女	2.28*	2.08****	2.03****	2.23****	1.89	2.10***	14>23>5
	計	2.22	1.99	1.96	2.16	1.89		14>23>5
ジャン	男		1.81	1.64			1.73	2>3
	女		1.82	1.68			1.75	2>3
	計		1.82	1.66				2>3
重要度	男	2.76	2.48	2.74	2.90	2.44	2.66	4>13>25
	女	2.94****	2.57*	2.87**	3.13****	2.54*	2.81****	4>13>25
	計	2.85	2.52	2.81	3.01	2.49		4>13>25

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

他の表情攻撃、背後攻撃、断絶攻撃、間接的主張、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制の各方略においては、女子の方が男子より高くなっている。直接的主張及びジャンケンにおいては顕著な差は見られなかった。下位検定の結果、持物の損害場面における直接的主張は男子の方が高いが、役割の怠惰場面における直接的主張は女子の方が高くなっている。重要度においては、女子の方が男子よりも高いという結果であった。

場面間には、全体的には前記の国×場面の分析結果と同様に、全ての方略において有意差が見られた。性×場面に有意な交互作用はみられず、等質サブグループにみられるように、男子と女子の各場面に対する方略や重要度の評定はほぼ同様の傾向を示している。

(3) 国×性の2要因に関する分散分析の結果

Table 5は国別、性別の社会的問題解決方略と重要度の評定値である(下位検定で日中間に有意差が認められた項目は*印で、男女間に有意差が認められた項目は斜体字で示す)。国(2)×性(2)の多変量分散分析(ANOVA4)及びT検定の結果、国別、性別とも多くの方略において有意差が見出された。

日中間には、全体的には前記の国×場面の分析結果と同様に、多くの方略において有意差が見られた。下位検定の結果、社会的問題解決方略と重要度において、日中間に示された差は男子・女子を通して同様の傾向を示している。以下は、日中間、男女間に交互作用が見られた方略について列挙する。持物の損

Table 5 国別、性別の社会的問題解決方略と重要度の評定値

		持物		意見		権利		名誉		役割	
		中国	日本	中国	日本	中国	日本	中国	日本	中国	日本
直攻	男	1.46	1.68***	1.48****	1.29	1.81	1.79	1.56	1.47	2.04	1.91
	女	1.32	1.42+	1.35****	1.16	1.52	1.45	1.42****	1.22	1.71	1.63
表情攻	男	2.29	2.49**	1.70	1.64	2.08	2.39****	2.30	2.40	2.07	2.33****
	女	2.51	2.60	1.84****	1.62	2.29	2.55****	2.49	2.39	2.29	2.56****
背後攻	男	2.06	2.52****	1.59	1.56	2.03	2.29****	2.05	2.34****	1.92	2.10*
	女	2.46	2.95****	1.66	1.83**	2.37	2.75****	2.31	2.62****	2.11	2.56****
断絶攻	男	1.70	1.95****	1.55**	1.40	1.91	2.09*	2.13	2.69****	1.67	1.81*
	女	1.90	2.14***	1.45	1.48	2.02	2.26****	2.43	3.00****	1.74	1.96***
直主	男	1.96	2.50****	2.79****	2.47	2.75	2.91*	2.33****	2.02	2.93	3.26****
	女	1.95	2.14*	2.75****	2.44	2.89	2.86	2.44****	1.77	3.11	3.39****
間主	男	2.22	2.60****	2.43	2.42	2.36	2.29	2.59****	2.25	2.53	2.59
	女	2.44	3.06****	2.59	2.63	2.48	2.57	2.73****	2.46	2.63	2.94****
関係抑	男	2.39+	2.26	2.07	2.50****	1.99	1.91	2.01	2.38****	2.05*	1.90
	女	2.35	2.50*	2.21	2.60****	1.98	2.18****	2.13	2.57****	1.99	2.00
騒ぎ抑	男	2.29****	2.04	1.99*	1.80	2.01***	1.78	2.13	2.03	2.02****	1.77
	女	2.43****	2.15	2.14	2.03	2.10+	1.97	2.13	2.33*	2.00**	1.81
ジャン	男			1.78	1.84	1.62	1.67				
	女			1.76	1.88	1.56	1.79****				
特殊抑	男	2.73**	2.51			1.96	2.15*	2.38	2.52+		
	女	2.62	2.57			1.94	2.31****	2.61	2.57		
重要度	男	2.54	3.00****	2.84****	2.12	2.68	2.82*	2.81	2.97*	2.28	2.57****
	女	2.69	3.15****	2.84****	2.33	2.79	2.93*	3.03	3.23***	2.39	2.69****

+ p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.005, **** p<.001

害場面においては、直接的主張では日本男子が中国男女及び日本女子より顕著に高く、間接的主張では日本女子が中国男・女及び日本男子より高くなっている。関係重視抑制では中国男子が日本男子より高く、中国女子が日本女子より低くなっている。意見の対立場面においては、背後攻撃では日本女子が中国男・女及び日本男子よりも高く、断絶攻撃では中国男子が日本男・女及び中国女子よりも高く、重要度では日本男子は中国男・女及び日本女子よりも低い。権利の侵害場面においては、関係重視抑制では、日本女子が中国男・女及び日本男子より高い。名誉の侵害場面においては、直接的主張では日本女子が中国男・女及び日本男子よりも低く、騒ぎ回避抑制は日本女子が中国男女及び日本男子より高くなっている。役割の怠惰場面においては、背後攻撃と間接的主張では日本女子が中国男・女及び日本男子よりも顕著に高くなっている。

性差に関しては、全体的には前記の性×場面の分析結果と同様に、多くの方略において有意差が見られた。下位検定の結果、社会的問題解決方略と重要度において、日本の方が中国より多くの項目において差が見られた (Table 4 参照。表中の斜体字は有意差を示す。中国では26対、日本では33対)。方略に関して見ると、中国では表情攻撃において性差が顕著であったが、日本では断絶攻撃、間接的主張、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制において性差が顕著であった。

各場面で最も高くなっている方略を見ると、持物の損害場面においては、中国では男女ともに相手が故意でないため抑制する非故意性抑制が最も高くなっているが、日本では男女ともに間接的主張が最も高くなっている。意見の対立場面においては、中国では男女ともに直接的主張が高くなっているが、日本では男子は関係重視抑制、女子は間接的主張が高

いという結果となっている。権利の侵害場面においては、中国も日本も男女ともに直接的主張が最も高い。名誉の侵害場面においては、中国では男女ともに間接的主張が最も高いのに対して、日本では男女ともに断絶攻撃が最も高くなっている。役割の怠惰場面においては、中国も日本も男女ともに直接的主張が最も高くなっている。

3-2 葛藤解決目標

(1) 因子分析の結果

中国と日本の全対象者の12項目の葛藤解決目標に対して因子分析を行った。その結果、次頁の Table 6 に示すような3つの因子を抽出した (累積寄与率=41.87%)。因子分析においては、初期解は主因子法であり、共通性の初期値は SMC と指定し、因子の回転はバリマックス法とした。

第1因子は、「自尊心やプライドを回復したい」「相手から尊重され、丁寧に扱ってもらいたい」などの項目から構成され、「社会的目標因子」と命名した。第2因子は、「金銭的に有利な結果を得たい」「弁償してもらいたい」の項目からなり、「経済的目標因子」と命名した。また第3因子は、「相手と良い関係を維持したい」「相手とお互いに理解し合いたい」の項目からなり、「関係目標因子」と命名した。

(2) 中国と日本の葛藤解決目標

社会的目標、経済的目標、関係目標の3因子について、それぞれの因子に含まれている項目の評定値を平均し、日中別、男女別で集計した結果は Fig. 1 に示したとおりである。

Fig. 1 から見られるように、中国においても日本においても、社会的目標、関係目標が強く望まれ、経済的目標があまり望まなかった。社会的目標において、中国男女ともに日本男女より大きく上回り、関係目標において

Table 6 葛藤解決目標に関する因子分析

3 私は、相手から尊重され、丁寧に扱ってもらいたい	0.690		
4 私は、自分の名誉、体面、評判を回復したい	0.679		
5 私は、自分の自由やプライバシーを守りたい	0.533		
9 私は、相手から公平に扱われたい	0.632		
10 私は、自尊心やプライドを回復したい	0.790		
11 私は、自分の仕事、勉強、予定を進めたい	0.506		
6 私は、金銭的に有利な結果を得たい		0.579	
12 私は、弁償してもらいたい		0.779	
1 私は、相手と良い関係を維持したい			0.633
7 私は、相手とお互いに理解し合いたい			0.559
因子負荷量の2乗和	2.834	1.227	0.964
因子の寄与率 (%)	23.614	10.221	8.035
累積寄与率 (%)	23.614	33.835	41.870

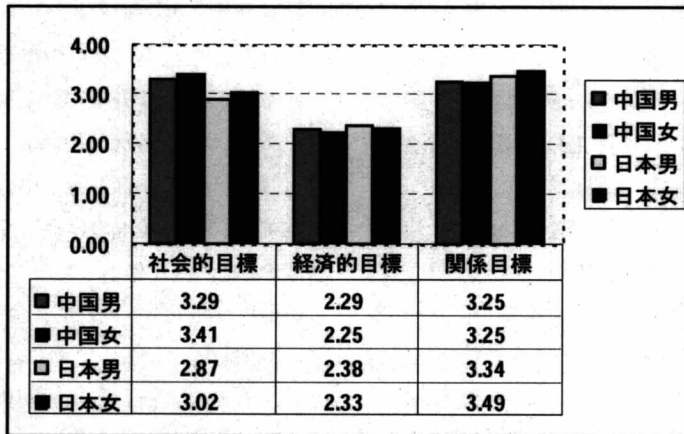


Fig.1 中国男女、日本男女の葛藤解決目標の評定値

は、日本男女が中国男女より上回った。

国(2)×性(2)の多変量分散分析(ANOVA)及びT検定の結果、社会的目標においては、中国男女ともに日本男女より有意に高い($p<.001$)。中国女子が中国男子より、日本女子が日本男子より、有意に高い($p<.001$)。関係目標においては、全体的に日本が中国より有意に高く($p<.001$)、下位検定の結果、日本女子が中国女子より有意に高く($p<.005$)、日本男子が中国男子より高い傾向が見られた($p<.10$)。日本女子が日本男子より有意に高い($p<.01$)。経済的目標においては、日中間、男女間差が少なく、全体的に日本が中国より

高い傾向が見られた($p<.10$)。国×性の交互作用は有意でなかった。

3-3 社会的問題解決方略と葛藤解決目標との相関

各葛藤場面の社会的問題解決方略と葛藤解決目標との相関関係について、国別、性別に分析を試みた。その結果がTable 7である(相関係数0.2以上、相関が見られた項目)。全体的に高い相関は見られなかった。

Table 7 社会的問題解決方略と葛藤解決目標との相関

	社会的目標				経済的目標				関係目標	
	中国男	中国女	日本男	日本女	中国男	中国女	日本男	日本女	中国女	日本男
直攻	-0.31	-0.23					0.24	0.27		
表情攻			0.20				0.22			
背後攻			0.27	0.23						
断絶攻			0.28		0.21	0.31	0.25	0.23		
直主		0.34	0.27	0.23		0.22	0.23	0.24	0.20	0.22
間主		0.25	0.32	0.27		0.22				0.27
ジャン	-0.24									
重要度	0.30	0.38	0.40	0.33		0.22	0.26	0.21		

社会的目標は、中国男女の直接的攻撃、中国男子のジャンケンと弱い負の相関を示した。中国大学生において、「自尊心やプライドを回復したい」「相手から尊重され、丁寧に扱ってもらいたい」「自分の名誉、体面、評判を回復したい」という「社会的目標」を強く望めば、直接的攻撃も、安易に解決に至る「ジャンケン」も取らない傾向が見られる。社会的目標は、日本男子の表情攻撃、断絶攻撃、日本男女の背後攻撃、日本男女及び中国女子の直接的主張、間接的主張と弱い正の相関を示した。日本大学生において、「社会的目標」を強く望めば、間接的攻撃や主張的方略をとる傾向が見られる。中国大学生女子においては、主張的方略を通して「社会的目標」を達成する傾向が見られる。社会的目標は、日中男女の重要度といずれも弱い正の相関を示した。「社会的目標」を強く望めば、葛藤を重要視する傾向が窺える。

経済的目標は、日本男女の直接的攻撃、日本男子の表情攻撃、日中男女の断絶攻撃、日本男女及び中国女子の直接的主張、中国女子の間接的主張と弱い正の相関を示した。経済的目標を強く望めば、積極的に主張したり、損害を与えてきた相手に不満のあまり絶交したり、直接的に攻撃したりする傾向が見られる。経済的目標は、日本男女の「非故意性抑制」（相手が与えてきた損害が故意でない

め抑制する）と弱い負の相関を示した。経済的目標を強く望めば、相手が非故意であれ、抑制せず弁償を求める傾向が見られる。経済的目標は、日中男女の重要度とも弱い正の相関を示した。経済的目標を強く望めば、葛藤を重要視する傾向が窺える。

関係目標は、日本男子の直接的主張と間接的主張、中国女子の直接的主張と弱い正の相関を示した。「相手と良い関係を維持したい」「相手とお互いに理解し合いたい」という「関係目標」と強く望めば、一方的に自己抑制するより、むしろ積極的に主張することによって達成しようとする傾向が見られる。関係目標は、重要度と相関が見られなかった。

いずれの葛藤解決目標も関係重視抑制、騒ぎ回避抑制と相関を示さなかった。

4. 考察とまとめ

中国と日本における大学生の社会的葛藤場面における問題解決方略及び葛藤解決目標に関する今回の結果から、以下のような点を指摘することができる。

(1) 社会的問題解決方略について

社会的問題解決方略の選択においては、多くの面で性差が認められた。例えば、直接的攻撃では、全ての場面において男子が女子より高い。また、表情攻撃、背後攻撃、断絶攻

撃、間接的主張、関係重視抑制、騒ぎ回避抑制の各方略においては、女子が男子より高い。直接的主張では、持物の損害場面において男子が高く、役割の怠惰場面において女子が高くなっている。重要度においては、女子が男子より高いという傾向であった。これは、「発達段階が高くなるにしたがって間接的方略と抑制的方略が高くなる傾向がある（羅・堂野，2007）」ことと対照して考えると、「道徳性や社会性の発達においては女子が男子より早い（荒木，1988、山岸，1976、1995）」ことを裏付けるものと考察できる。つまり、状況を見極め、直接的に主張したり、間接的に対応したり、抑制したりする社会的スキルは、女子の方が男子よりも早く習得しているのではないかと考えられる。

社会的問題解決方略の選択においては、場面によっても大きな差異があることも明らかになった。持物の損害場面では、全体的には関係重視抑制及び騒ぎ回避抑制が他の全ての場面より高くなっている。この場面で最も高くなっている方略は非故意性抑制である。相手の非故意性が考慮され、金銭的利益よりも友人関係を重要視する意識、金銭的トラブルを恥じる意識が作用し、直接的に対決することが少なくなっているのではないかと考えられる。意見の対立場面では、全体的に攻撃的方略及び重要度が他の場面よりも低くなっていること、この場面で最も高い方略と重要度においては中国と日本では異なる様相を呈していることが特徴的である。権利の侵害場面では、背後攻撃、断絶攻撃が他の全ての場面より高くなっている。この場面の侵害は相手の意志によるもので、相手への不満も高まるが、直接対決では喧嘩を招く可能性が予測でき、捌け口として背後攻撃や断絶攻撃として表出されるのではないかと考えられる。名誉の侵害場面は、最も重要視され、表情攻撃も

他の場面よりも高くなっている。権利の侵害と同様、直接対決では効果的でなく喧嘩を招く可能性が予測できるため、表情や態度で不満を示したものと考えられる。この場面で最も高くなっている方略も中国と日本の間に差異があり、文化的な背景が影響を及ぼしているのではないかと考えられる。役割の怠惰場面では、重要性は高く評価されていないにも関わらず、直接的攻撃、直接的主張が他の全ての場面よりも高くなっている。役割の遂行は社会人として基本的に要求されることであり、社会的に認められないその行為が自分に迷惑を及ぼしているとすれば、攻撃や主張もしやすくなるのではないかと考えられる。したがって、この場面で最も高い方略は中国も日本も直接的主張となっている。

社会的問題解決方略の選択においては、国によっても大きな差異が認められた。

①全体的には、騒ぎ回避抑制は中国の方が高く、間接的攻撃（表情攻撃、背後攻撃、断絶攻撃）、間接的主張、関係重視抑制、ジャンケン各方略においては日本の方が高い。日本の大学生が中国の大学生より人間関係を重視し、間接的方略を選択する傾向があると考えることもできる。中でも、両者ともに引き下がらずにそのまま安易に解決に至ろうとする、日米などの比較研究（金城・梅本，1991；渡部，1993；山岸，1998）において見出した日本独自のジャンケン方略は、同じ東洋に位置する中国よりも強いという結果となっている。日本人のジャンケンに対する愛着は個人間の葛藤解決だけでなく、楽しい行事の一つとして祭りやパーティーの人気項目としても生かされている。

中国では、個性を重視し、自分の独自の考えや意志を持つことが評価される一方、衝突を抑えるため、些細なことでは波風を立たないことも社会的に大変評価されている。この

ような社会的価値観が中国大学生の騒ぎ回避意識に影響をおよぼしていると考えられる。

②各場面で最も選択傾向が高い方略は、中国と日本で大きく異なっている場面が見られた。以下に、その背景に影響を及ぼすと考えられる両国の社会的価値観について考察を試みる。

持物の損害場面においては、中国では男女ともに非故意性抑制が高いのに対して、日本では男女ともに間接的主張が高くなっている。耐えられる範囲内の損害を受けた場合、中国では相手の非故意性が受け止められやすいことが反映しているものと考えられる。同様に、自分の非故意により他者や社会にかけた迷惑に対しても、「自分には悪意がない」と思い、大目に甘く見てしまう傾向となるのではないかと考えられる。「中国人は謝らない」という日本人が抱くイメージは、こうした価値観が作用しているのかもしれない。一方、日本では、非故意であっても、他者に迷惑をかけた事自体、代償を払うべきという考えが強く、金銭的トラブルに恥じることに相まって、間接的主張が高くなったものと考えられる。

意見の対立場面においては、中国では男女ともに直接的主張が高いのに対して、日本では男子は関係重視抑制、女子は間接的主張が高くなっている。また、中国では意見の対立場面が名誉の侵害場面の次に重大な問題と捉えられ、直接的攻撃、表情攻撃、直接的主張が日本より高く、他の場面の結果とは逆転している。中国には広大な国土に56民族が混住しており、各民族がそれぞれの言語と文化を持っている。そうした背景を持つ中国の人々は自己を確立することが大切であり、「個性」には高い評価が与えられている。したがって、意見の対立の場合、自分の考えや意見を貫く態度が形成されやすいと考えられる。また、意見の対立は情緒的反応に結びつきやすく、

攻撃的行動としても表出されやすいのではないかと考えられる。一方、日本では他者の意見に巧く同調することは人間関係を円滑にするために必要なスキルであり、男子は関係重視で抑制し、女子は主張しても相手の気持ちを考慮した間接的手段となっているのではないかと考えられる。

名誉の侵害場面においては、中国では男女ともに間接的主張が高いのに対して、日本では男女ともに断絶攻撃が高くなっている。この背景には、日本では不満を持つ相手に対して対決して関係を崩壊するよりも波風を立てずに平穩に関係性を絶っていく方がスマートと考える若者が多いのかもしれない。

③社会的問題解決において性差が認められた方略は中国の方が少ない。これは、「子どもの性別による親の養育態度の差異は中国の方が少ない（羅、2007）」とする結果と軌を一にする結果と考えることができる。現在の中国は男女共働き社会であり、一人っ子社会でもある。性差の傾向が小さくなるのは予測に難くない結果でもあろう。

(2) 葛藤解決目標について

「自尊心やプライドを回復したい」「相手から尊重され、丁寧扱ってもらいたい」「自分の名誉、体面、評判を回復したい」などの項目を含めた「社会的目標」においては、中国男女ともに日本男女より、大きく上回っている。中国人は「愛面子」（メンツ重視）と言われているが、「メンツ」いわば世間への顔でありプライドである。この調査結果もその一端を表わしていると言えよう。問題解決方略において、中国大学生は、名誉の侵害場面における表情攻撃、断絶攻撃、間接的主張が他の全ての場面より最も高くなっている。このことも自分の名誉、体面、評判を重視することの現われと考えられよう。一方、「社会的目標」においては、中国女子が中国男子

より、日本女子が日本男子より有意に高い。女子は男子より社会性が発達し、相手からの扱い態度により敏感で、より自分のプライドを守る傾向が強いと思われる。

「関係目標」においては、日本の方が中国より有意に高い。日本が西洋圏のアメリカ(大淵ら, 1996)だけでなく、東洋圏に位置する中国に比べてもより関係志向が強いことの反映と見ることもできる。しかし、葛藤解決目標は問題解決方略と明瞭な相関は見られない。葛藤解決の関係目標と関係重視抑制の相関係数は、日本男女ともに0.19である。大淵・福島(1997)も、日本人の回避(抑制)の使用は関係目標に動機付けられたものと予想し検討したが、支持されなかった。むしろ、日本人の葛藤回避が同一性目標(「自分の名誉、体面、評判を回復したかった」「自尊心やプライドを回復したかった」)に関連していることが示され、「同一性目標とは肯定的な社会的印象を維持しようという願望である。個人主義的文化においては、人々は自己主張によって積極的に体面維持をはかろうとするであろうが、日本のような集団主義文化ではむしろ、物事を荒立てないことによって体面を保とうとする傾向があるのではないか」と考察している。また、「日本人にとって関係維持の動機づけは内発的なものではなく、社会的圧力に従って志向された社会規範に過ぎなかったという可能性がある(大淵ら, 1996)」のように、名誉の侵害場面において日本の大学生が断絶攻撃が高いという本研究の結果から考えると、日本人の関係重視は、葛藤相手との関係よりも自分を取り巻く周囲の人と与える印象、周囲の人々との人間関係を強く意識していることの反映かもしれない。

(3) 葛藤解決目標と社会的問題解決方略との相関について

全体的にみると、葛藤解決目標は社会的問

題解決方略と高い相関が見られなかった。特に関係目標と関係重視抑制とは相関が高いのではないかと予想していたが、上に述べたように、大淵・福島(1997)と同様、相関が見られなかった。問題解決の時取る方略は、達成目標よりも別の要因、例えば相手が同性か異性か、相手との上下関係など、によって決定されているかもしれない。

社会的目標と経済的目標は、多くの方略と弱い相関を示した。特に社会的目標と中国男女の直接的攻撃、中国男子のジャンケンと弱い負の相関を示したことが興味深い。大淵ら(1996)はALTは日本人教師より公正目標を強く期待し相対的に攻撃の方略を多用する結果であったが、中国の大学生では逆に、社会的目標を強く望みながら、直接的攻撃をしない傾向が見られた。これは、中国の大学生が日本の大学生より「騒ぎ回避抑制」が高いこととも関連しており、中国大学生は直接的攻撃によって物事を荒立てると、逆に自尊心やプライド、自分の体面や評判を傷つことになるという思いが強いからではないかと思われる。

また、ジャンケンが、双方下がらず安易に解決できることから日本で愛用されているが、中国大学生では逆に、「社会的目標」を強く望めば、「ジャンケン」を取らない傾向が見られる。ジャンケンは双方を傷つけない良い解決法とみなさず、むしろ自分のプライドや体面、自分の主張の正当性を犠牲にする曖昧な結末であり、すっきりならない結末である。「是」と「非」をはっきりしたがる中国社会では、ジャンケンは意見の対立や葛藤の解決において、良い手段とは思わないであろう。

関係目標は、関係重視抑制と相関せず、主張的方略と正の相関を示したことも興味深い。一方的に自己抑制することは双方の関係に貢献せず、むしろ積極的な主張によって合理的

に解決することが双方の関係を維持するになるという人間の本心の表れであろう。

いずれの葛藤解決目標も関係重視抑制、騒ぎ回避抑制と相関を示さなかった。抑制することは、社会的目標、経済的目標を達成できないのみならず、上に述べたように、関係目標さえ貢献しないためであろう。

謝辞：本論文の作成においては、山口学芸大学の堂野佐俊教授に随所で貴重な指摘を頂戴致しました。記して謝意を表します。また、中国でアンケート配布と回収をしてくださった南昌大学外国語学院の刘琼教授、日本でアンケート配布と回収をしてくださった山口大学の各コースやゼミの先生方に深く感謝を申し上げます。

References

- 東敦子・野辺地正之 1992 幼児の社会的問題解決能力に関する発達的研究—けんか及び援助状況の解決と社会的コンピテンス 教育心理学研究, 40(1), 64-72
- 東洋 1994 日本人のしつけと教育—発達の日米比較にもとづいて 東京大学出版社
- Alberti, R.E. & Emmons, M.L. 1970 *Your perfect right: A guide to assertive behavior*. San Luis Obispo, California: Impact Publishers, Inc. (菅沼憲治・ミラーハーシャル訳 1994 自己主張トレーニング 東京図書株式会社)
- 荒木紀幸 1988 道徳教育はこうすればおもしろい—コールバーグ理論とその実践 北大路書房
- Fukushima, O. & Ohbuchi, K. 1996 *Antecedents and effects of multiple goals in conflict resolution*. International Journal of Conflict Management, 7, 191-208
- 二神多栄・神谷ゆかり 2004 中学生の対人葛藤場面における処理方法の理由付け 安田女子大学大学院文学研究科紀要 教育学専攻, 9, 151-165
- 徐甫潤 2004 小学生の社会的問題解決方略における日韓比較 人間科学研究, 11, 49-64
- 徐甫潤 2005 対人葛藤場面における社会的問題解決方略に関する発達的研究 神戸大学発達・臨床心理学研究, 4, 1-11
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学 (第2版) 東京大学出版社
- 嘉数朝子・前原武子・金城洋子 1991 児童の社会的問題解決能力—社会測定的地位や親和動機づけとの関係 琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部, 38, 339-346
- 金城洋子・梅本堯夫 1991 児童における対人交渉能力の発達 発達研究, 7, 115-134
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達—行動の自己制御機能を中心に 東京大学出版社
- 倉持清美 1992 幼稚園の中のものをめぐる子ども同士のいざこざ—いざこざで使用される方略と子ども同士の関係 発達心理学研究, 3(1), 1-8
- 小森千世・宮本正一 1992 相手の性別・年齢が対人的葛藤解決に及ぼす効果 岐阜大学教育学・心理学研究紀要, 11, 181-192
- 子安増生・鈴木亜由美 2002 幼児の社会的問題解決能力と「心の理論」の発達 京都大学大学院教育学研究科紀要, 48, 63-83
- Ohbuchi, K., Chiba, S., & Fukushima, O. 1996 *Mitigation of interpersonal conflicts: Politeness and time pressure*.

- Personality and Social Psychology
Bulletin, 22, 1035-1042
- 大淵憲一・菅原郁夫・Tyler, T.R.・Lind,
E.A. 1996 葛藤における多目標と解
決方略の比較文化的研究：同文化葛藤と
異文化葛藤 東北大学文学部研究年報,
45, 187-202
- 大淵憲一・福島治 1997 葛藤解決における
多目標 心理学研究, 68(3), 155-162
- 羅蓮萍・堂野佐俊 2005 社会的問題解決に
関する発達心理学的研究：日本における
研究の動向 山口大学教育学部研究論叢,
55, 171-187
- 羅蓮萍・堂野佐俊 2007 中国における社会
的問題解決方略の発達の变化 山口大学
教育学部研究論叢, 56, 151-169
- 羅蓮萍 2007 中国と日本における親子関係
の発達の变化 東アジア研究, 5, 55-66
- 箕浦康子 1990 文化の中の子ども 東京大
学出版会
- 王少鋒 2000 日・韓・中三国の比較文化論：
その同質性と異質性について 明石書店
- Phelps, S. & Austin, N. 1975 *The asser-*
tive woman. San Luis Obispo, Califor-
nia : Impact Publishers, Inc.
- 佐藤淑子 1991 英国在住の日本人就学前幼
児の異文化学習—社会的場面に於ける
「自己制御」の発達の日英比較 発達研
究, 7, 145-165
- 佐藤淑子 1993 英国在住の日本人就学前幼
児の異文化学習—社会的場面に於ける
「自己制御」の発達の日英比較—結果と
考察 発達研究, 9, 41-60
- 佐藤淑子 1994 英国在住の日本人就学前幼
児の異文化学習—社会的場面に於ける
「自己制御」の発達の日英比較—母親の
質問紙の分析結果 発達研究, 10, 17-
29
- 佐藤淑子 2001 イギリスのいい子・日本の
いい子 中央公論新社
- 渡部玲二郎 1993 児童における対人交渉方
略の発達—社会的情報処理と対人交渉方
略の関連性 教育心理学研究, 41(4),
452-461
- 山岸明子 1976 道徳判断の発達 教育心理
学研究, 24, 29-38
- 山岸明子 1995 道徳判断の発達に関する実
証的・理論的研究 風間書房
- 山岸明子 1998 小・中学生における対人交
渉方略の発達及び適応感との関連—性差
を中心に教育心理学研究, 46(2), 163-
172
- 吉武久美子 1991 ひくことが持つ優位性—
自己主張と対人関係円滑化を両立させる
ための対人的コミュニケーション方略
心理学研究, 62(4), 229-234
- 吉野絹子 1987 対人的葛藤の解決過程の分
析(1)—葛藤に対する反応パターンと
その類型化 社会心理学研究, 2(2),
35-44